

インタビュー

再び、子どもたちと向き合って

おかもと ゆみ
岡本由美さん



60代 女性 兵庫区在住

母子指導員として勤務していた兵庫区の神戸母子寮（母子家庭が入所し自立を目指す施設）が、阪神・淡路大震災で5人の死者を出して倒壊する。その再建に駆け回り、1997年に長田区で新しい母子寮が建つことになるが、開設直前に体調を崩し、母子寮を退職。1999年に故郷の高知へ、2004年には神戸へ戻り、ヘルパーステーションでサービス提供責任者として働く。現在は兵庫県明石市の児童発達支援事業所（＊1）の所長。

『震災が残したもの 2、14』でもお話を伺っている。

■所長になるまで

—— 2010年にお話を伺いした時はヘルパーステーションに勤めていた岡本さんが、どういう経緯で、児童発達支援事業所の所長に就任したのかを教えてください。

岡本 2013年までヘルパーステーションに勤めていたんだけど、極度の疲労とメニエール病になってしまって。職場では大事にしてくれたんだけど、辞めせてもらったんです。

その後、知人から「知人の児童発達支援事業所を手伝ってもらえないか」と連絡があって。

—— それがきっかけだったんですね。

岡本 その話が来た時、自分の役割は何なのかを明確にしないで、ただ話があったから行くことはしたくないって思っていたら、発達障害の子どもたちへの支援の仕事だと聞かされま

した。どういう仕事なのか、漠然とはわかっていても具体的な療育的内容がわからなくて、本を読んだり研修に行ったりして、やっと少しづつ理解ができたの。

—— それで所長を引き受けた。

岡本 所長は齢が行った者の役割かなと思って引き受けました。

それで、発達障害の勉強をするうちに、神戸母子寮の子どもたちの何人かは発達障害児やったんやな、と思い当たる節が出てきて、専門的な支援をしてあげられなかつたことが申し訳なかつたと反省しました。

学校でも母子寮でも生活がしにくくて疎外感を味わっていた子、一生懸命やろうとしているけどできない子。そんな子どもたちは、発達障害児だったんじやないかと、今ならそう考えられます。私を含め母子寮の職員に、今のような発達障害の知識があつたら、母子寮の子どもたちももっと生きやすく暮らせたんじやないかなと思います。

■体に刻みついた経験

岡本 発達障害の勉強も大事だけど、人間としての基本理念は児童の仕事に就く者にとってはとても大事です。昔4年間勤めていた保育所で教えられたことが今もすごく役に立っています。その保育所には今で言う発達障害児もいてたように思います。その保育所で先輩たちに教えられたことの意味が、この仕事に就いてすごくよくわかります。そこで教えてもらったことが母子寮でも私の仕事の力になっていたんだけど、児童発達支援の仕事に就いている現在も、私の原動力になっていると思います。

—— 保育所での経験と重なってくるようなケースが、今の事業所でもありますか。

岡本 保育所で働いていたのはかなり昔なので時代が違うし、現在の子どものほうが裕福なんだけど、子どもの心、求めているものは同じような気がします。

その保育所が教えてくれたのは、障害のある子どもも、障害の前に人間であること。私たちは、ひとりの人間としての子どもたちと向き合っているんだ、と。子どもや親としっかりと向き合って話を聴く、そして寄り添っていく、そういうことを私の体に刻みつけてくれたんですよね。私は落ちこぼれ職員でしたけれどね（笑）。

■ボクシングで変わる子どもたち

—— この事業所では「スポーツボクシング」という取り組みがあるそうですが、どういう経緯で始めたのでしょうか。

岡本 どんな事情がある子どもたちにでも、分け隔てなくボクシングを教えている溜田純士先生という人が明石にいてね。

溜田先生は建築屋さんなんだけど、小さい時からボクシングをやっていたんで、子どもたちのために自分の仕事場の上を改装してジムにし、挨拶から掃除からきちんと教えておられます。障害のある子どもも通っているんだけど、どの子も生き生きしてきたんですって。家

から全然出なかった子が、他の子どもよりも一時間も早く来て、掃除して片付けて準備して、終わるときちゃんと挨拶して帰るんですって。すごいよね。

—— そんなに変わるんですか。

岡本 そうなんですね。それで、私がいた事業所でボクシングをすることになったんですが、賛否両論あったんです。それでもやってみないとわからないと、実施することになったんです。

先生は、ボクシングを始める時と終わる時には、いくつか約束をして、そして子どもたちがお掃除もする。そうしたら、子どもたちがきっと話を聞くようになった。いつもは全然動かなくてボクシングはしないと思っていた幼児が、ボクシングのグローブをつけたら楽しそうに動いていたということもありました。

—— 初めてグローブをつけた時からですか。

岡本 はい。グローブをつけて、先生のほうをじっと見て、先生の指示通りに動けたんです。終わったときには、自信がついた顔になっていました。お母さんは嬉しくて泣いていました。すごいわね。

■すべては「自立」のため

—— 岡本先生がいる事業所は、1つ目の教室ができた二年後に2つ目の教室ができたそうですが、2つ目の教室ができるのが、ずいぶん早いですね。

岡本 それだけニーズがあるの。希望者は多いです。

—— 近隣にこういった施設はないのですか。

岡本 児童発達支援事業所はたくさんはありませんが、放課後等デイサービス（＊2）の事業所は増えています。

当事業所は療育を基本とする子どもたちの居場所です。本を読んだり、ドイツゲームとか卓球をしたりするから、楽しいです。子どもたちは何をおいても来たがるみたい。

—— ドイツゲームとは何ですか。

岡本 スタッフも子どもたちも、コミュニケーションを取りながら進めるゲームです。機械のゲームじゃなくて盤とかカードで遊ぶもので、材質も木とか紙とかでできています。

夏休みも、子どもたちはそんなに来ないと思っていたらたくさんきました。だから、みんなでおやつを作って、宿題をして「夏休みの終わりに宿題ができていないと泣かんように、ちゃんとやろう」って過ごしました。

—— 今後岡本先生がやりたいことや、力を入れたいと思うことはなんでしょう。

岡本 子どもたち一人ひとりを理解して、その子どもたちがリラックスできるような居場所作りをしていきたいです。それとね、大事な目的は自立なんです。

—— 自立ですか。

岡本 多くの子どもたちはやがて就職をして、自立を目指し始めます。例えば、挨拶をする、

靴を揃える、というようなことができないと仕事に就けません。ここではそういう生活習慣も学習していくんです。一番大切なことは、わからないことがあれば「わかりません。教えてください」と言うことができるよう支援していくことです。

将来は仕事をしてお金を稼ぐ楽しみを味わってほしい。今はここでリラックスして、リフレッシュできる楽しさを覚えてほしい。そういう居心地のいい居場所作りを続けていきたいと思っています。だから、事業所では遊びも学習もスポーツも、自立のためにやっていると私は思っています。障害がある子は、体力がなく筋力が弱い場合が多いので、ボクシングだけでなく体操やヨガにも取り組んで、体のバランスや体幹を良くしていくことを考えています。

■100年経っても

—— 来年で震災から20年になりますが、何か意識されることありますか。

岡本 地震で失った母子寮の五人は本当に大切な人たちだったので、何年経っても悲しみが癒されることはないし、忘れられない。亡くなった子どもはいつまでも愛おしいし、亡くなったお母さんたちとは、私は心の中でいつも会話をしています。そしていつも「ごめんなさい」と謝っています。古い母子寮だったので建て直しをする前に地震が来てしまって、潰れてしまいました。早く建て直しをしていれば、失われなかつた命だと悔やまれます。だから、20年経とうが100年経とうが、5人を失った悲しみは多分あまり変わらないんです。

母子寮にいた子どもたちの中で、連絡が取れない子どもたちがいるんで、その子たちに会ってから死にたいなと思ってる。ただ無事に暮らしていくなら、それでいいんですけどね。

2014年7月26日

神戸市中央区 喫茶店にて

聞き手・大久保賢一

*1 児童発達支援事業所

障害のある未就学の子どもが発達支援を受けられる施設。日常生活の自立支援や機能訓練を行ったり、遊びや学びの場を提供したりといった障害児への支援を目的にしている。

*2 放課後等デイサービス

障害のある就学児童が学校の授業終了後や長期休暇中に通うことのできる施設。生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進などの支援を行う。